

ピーマン白絹病の防除技術

農業研究部

1. 研究の背景

夏秋ピーマン栽培においては、一部ほ場で白絹病が発生し、大幅に減収する問題が生じている。そこで、定植前における土壌消毒剤の処理、及び定植後の土壌灌注剤の処理が白絹病の発生に及ぼす影響を明らかにした。

2. 研究成果の内容・普及のポイント

クロピクフローもしくはクロールピクリンにより定植前に土壌消毒を行うことで、生育後半まで白絹病の発生を低密度に抑制することができる。クロピクフローの方が防除効果は高い。土壌消毒用の機材がない場合は、定植後約30日おきにアフエットフロアブルもしくはリゾレックス水和剤を株元灌注することで、白絹病の発生を抑制することができる。



定植前の土壌消毒

定植後の株元灌注

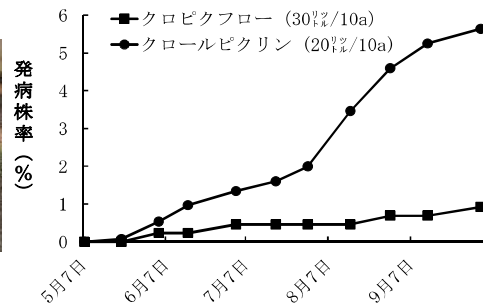


図1 土壌消毒後の白絹病の発病推移

注) 白杵市現地ほ場の試験結果。
クロピクフローは3月6日、
クロールピクリンは3月1日に施用。

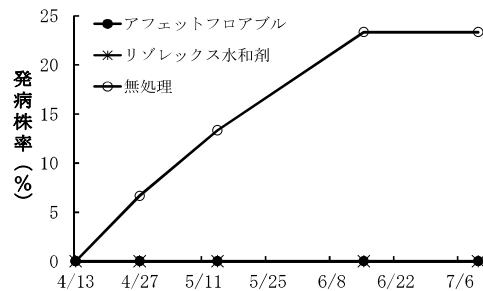


図2 株元灌注による白絹病の発病推移

注) 農業研究部場内ほ場（豊後大野市）の試験結果。
アフエットフロアブルは4月13日、5月14日、
6月15日、リゾレックス水和剤は4月13日に施用

3. 期待される効果

白絹病が発生した株は収穫皆無となるため、白絹病を抑制することで収量の向上が期待される。また、白絹病の発生抑制は次年度の発生源を減らすことにつながるため、白絹病の多発ほ場であっても、毎年土壌消毒を行うことで徐々に発病を減らしていくことができる。

4. 担当機関連絡先

農業研究部 病害虫チーム

TEL:0974-28-2078

住所：豊後大野市三重町赤嶺2328-8